地獄の窯の底で

忍者

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

忍者の里の４４期生、忍符号『終わりのエンド』。

音速のソニックと閃光のフラッシュと共に将来殺し屋として育てられる運命だったはずだったエンドのリミッターが外れていき、最終的にフラッシュと殺し合う物語。

本編完結。

目　次

地獄の窯のプロローグ ―― 1
音速のソニック ―― 4
閃光のフラッシュ ―― 7
惨劇 ―― 10
閉話　フラッシュから見た終わりのエンド ―― 13
決着と、虚しさと ―― 16
地獄の窯のエピローグ ―― 19

地獄の窯のプロローグ

鳩尾を大の大人にブン殴られ、俺はたまらず嘔吐する。

「……ゲフッ」

「この程度で吐くな出来損ない、貴様のような雑魚に時間を割くだけありがたいと思え！」

「はい！」

刀を再度構え、俺は再び猛然と教官に飛び掛かっていく。

再び足を払われ、地面に叩きつけられるまでそう時間はかからなかった。

理不尽にはもう慣れてしまった。

罵声を浴びせかけられることはあっても賞賛をもらうことはない。

反骨精神は当の昔に砕かれている。これが、今の俺の日常。

物心がついたときには、既に教官と刃物を交えていた。

毎日殴られ蹴られ罵声を浴びせかけられ、人としての尊厳を奪われていく。

全身に傷を作られるものの、決して深刻な後遺症が残らないように痛めつけられる。

両親の顔はもう思い出せない。どうしてここにいるのかすらも忘れた。

窓一つない真っ黒な建物に住み、無味乾燥な食事を口に含む。

俺と同じ境遇の孤児が２１人いたが、話は許されず、ここを出たところで将来は敵として、殺し屋として殺し合う関係でしかないと言い聞かされる。

忍者の里４４期生、忍符号『終わりのエンド』

それが俺に与えられた名だった。

殺すためだけに生きる、将来のレールが既に決まっている存在、その中でも最底辺である５班。

地獄の底の更なる底に俺は生きていた。

今日は5班同士の模擬戦を命令された。

「終焉脚」

俺の蹴りが鞭のようにしなり、同期の少年、忍符号『閃光のフラッシュ』に襲い掛かる。

呑み込みが悪い俺が身に着けた数少ない術であった。

しかしコンマ数秒にも満たない中の脚術、それを金髪の少年は瞬き一つせず避けていく。

フラッシュは能面のような表情を崩さない。これは余裕という訳ではない。

命令に従っているから戦っているだけで、元から俺のことが眼中にないのだ。

「青嵐拳」

フラッシュは俺の視界から一瞬で消え、俺が瞠目したときには既に背後に回られ複数の拳の連打を受ける。内臓を抉られるような拳の連打に俺はたまらず膝をついた。

戦闘不能であり、圧倒的なまでの敗北だった。

３０戦０勝３０敗。

俺はフラッシュに1度も勝ったことがない。

フラッシュは倒れた俺を一顧だに値しないかのよう目線を外し踵を返すと林の奥へと消えていった。

教官が命令したノルマをこなしたので、自己流の鍛錬に戻るのだろう。

それが、フラッシュにとって俺との模擬戦より価値がある時間なのは火の目を見る程に明らかだった。

「同じ5班でも、この差なのか」

「同じじゃないな、お前があまりにも不出来なだけだ」

俺の独り言に反応するように木に持たれかかりながら、模擬戦を観察していた同じ5班の『音速のソニック』が憐みの目を向ける。
「俺もフラッシュも落ちこぼれだがそれでも分かる。終焉のエンド、貴様には同期生22人の中でも圧倒的に殺しの才能が欠けている」
「……余計な私語は懲罰の対象だ。俺に話しかけるな」
「フン……教官の見ていない所では知ったことではないな。今だけだ。誰も未来の俺を縛りつけることはできない」
「……そうか。お前がそう思うのならそれでいいんじゃないか」
ソニックは同期生の中で数少ない、教官にメンタルを『壊されて』いない男だ。
彼の妄言が戯言にすぎないと分かっていつつも、言い返す程の何かの信念を持ち合わせているわけじゃない俺は気だるげに聞き流すことしかできなかった。
俺はフラッシュのような圧倒的な強さや、ソニックのような強靭なメンタルを手に入れていない。
それでもがむしゃらに己を鍛え続けることしか、今の俺にはできなかった。
「コロシの才能のない今の俺が、忍者の里で何ができるのか……」
地獄の窯の底で、よく晴れた青空を見上げる。いくら自問自答しても答えは返ってくる筈もない。
この時の俺は、知るすべを持ち合わせていなかった。
数年後、この忍者の里で一回たりとも勝利したことがない閃光のフラッシュと本気で殺し合うことになるなど。
本当に、微塵も知る由もなかった。

音速のソニック

音速のソニックは、俺にとって不思議な存在だった。
俺に興味を示さないフラッシュと違い、ソニックは何かにつけて俺を構う。
一度俺が食あたりを起こした際、死にかけた俺のために薬草を取ってきてくれたのもソニックだった。
ある日俺はソニックを呼び出し、施設から出たら敵同士にも関わらずどうして俺に甘いのかと問い詰めることにした。
真意が分からない無償の善意程、気持ち悪いものはない。俺は気味の悪いものをそのままにする趣味はなかった。
ソニックの答えは簡潔で、冷酷だった。
「お前を憐れんでいるだけだ」
「何……？」
ソニックは、眉をひそめる俺に対してあっけらかんと告げる。
「薄々気付いているとは思うが、俺やフラッシュはわざと手を抜いて５班に居る。フラッシュの目的は知らんが今の俺には野望がある、身を隠して鍛錬の質も上がるから都合がいい。だからお前のように真剣に鍛錬を行っていても５班の奴を見ていると同情しか湧いてこない。真剣にやった結果が『それ』ならなおさらだ」
気が付いた時、俺はソニックの胸倉を掴んでいた。
僅かに驚愕の表情を浮かべるソニックに、俺は憤怒と激情を叩きつける。
「お前やフラッシュほどの才能がないことは、俺が一番分かってる！なんで今まで生かされているのか分からないぐらいってこともな。だが俺を馬鹿にするなよソニック、俺もお前と同じ４４期生、訓練の質も同じなら条件は変わらない筈だ！いずれお前たちを追い抜いてやる……必ずだ！だから俺を憐れむな！」
ふつふつと煮え立つマグマのような怒りをぶつけられたソニックの行動は、やはり冷酷だった。

更に怒りをつのらせる俺に対し、ソニックはギラリと邪悪な笑みを受かべ容赦なく俺の鳩尾に拳を叩きこむ。
「その程度の腕でか、隙だらけだな！」
「うぐっ……」
痛みすらも後から襲ってくるような拳の連撃。
フラッシュと模擬戦を行った時と同じく、目にも止まらぬ早業だった。俺は何も分からずに攻撃を受け、蹲りながらギラリとした目でソニックを睨み付けることしかできなかった。
ソニックは俺に向かって嘲るように、しかし言葉の節々に隠しきれない高揚感を持ちながら言い放つ。
「口だけは達者なようだが、今のお前には圧倒的に力も速度も足りていない。
俺に追いつきたいのなら、もっと実力をつけることだ」
「くっ……」
それは、圧倒的な強者から叩きつけられた、どうしようもない現実だった。
しかし俺はどこかソニックの言葉に違和感を感じ取った。今まで庇護目線で見ていた扱いとはあきらかに違う。まるで、いつもソニックがフラッシュに対して取る態度のような。
そんなどうでもいいような、小骨が突き刺さったようなちょっとした違和感。
「俺の将来の夢――お前がもし本当に強くなったら教えてやるよ、終わりのエンド」
ソニックは俺の頭を軽く足蹴にすると、フラッシュが鍛錬している方角へと向かった。俺を蚊帳の外にして有意義な訓練を行うつもりなのだろう
俺は爪から血が出る程強く草の根を握りしめながら、ソニックを憎悪することしかできない。
「ちくしょう、強くなってやる、絶対に！」
暗殺者としては不要なはずの感情……屈辱。
そんなものを今更覚えるなんて、やはり己には殺しの才能はないの

だろう。
生存本能がもたらしたものなのか、競争本能がもたらしたものなのかは分からない。それでも、強くなってみせると。
土の味を味わいながら、血走った眼で。

この時のエンドは、気が付いていなかった。
毎日の定められた、一番厳しい特訓を特訓を非才の身でこなしている……こなせていることに。そしてあの音速のソニックの胸倉を、一時的にでも掴め驚愕の表情を浮かばせたということ、それが意味することに。
ほんの少し、微々たるものだが――
――終わりのエンドのリミッターは外れようとしていた。

閃光のフラッシュ

「……くそっ」

俺の口から出た言葉は、俺自身に向けられたものだった。

ソニックから味あわされた屈辱の事件から数年がたっていた。ソニックやフラッシュに追いつき追い抜くと豪語したものの、一朝一夕でという訳にはいかない。ただでさえ才能に劣っている上に、忍者の里の暗殺者育成プログラムは完璧だった。

俺のような凡人が心を壊され肉体が限界を迎えるギリギリを見極め教官はトレーニングを考えている。

これでは自己流の鍛錬を取り入れることすらできないだろう。

同じ鍛錬をこなしながらも涼しい顔をしているフラッシュやソニックを見ていると、俺は自身の非才さを嘆くことしかできなかった。

とはいえむしろ差が開いているのではないか、という雑念は当の昔に捨てた。

考えるだけ無駄でしかないからだ。

俺はちらりと、並走するフラッシュの顔を盗み見る。どうせ俺の速度に合わせているのだろう。

俺にとって閃光のフラッシュという男は、何を考えているのか全く分からない人物だった。

ソニックはまだ分かりやすかったが、フラッシュは本当に何を考えているのか分からない。

俺達をふとしたことで皆殺しにしてもおかしくない怖さがあった。

だが教官の洗脳を受け順調に殺人マシーンとなっているのかと思えば、模擬戦のふとした時に捨てきれない人情味を見せることもある。

もちろん俺の直感でしかないが、フラッシュは何か大きな信念を持って行動している気がするのだ。暗殺者同士刃を交えれば、分かることもあるということだろうか。

「フラッシュ……お前は何を考えているんだ？」

「余計な私語を口にするな」
普段はこの調子で取り付く島もない。能面のような表情からは何を考えているのか全く読み取れなかった。
分かるのはその圧倒的なまでの強さのみ。未だに俺に対して負け知らずのその強さだけは他の何よりも信用できた。
とはいえ異端なのはむしろ心を壊されていない俺やソニックの方なのかもしれない。
フラッシュの在り方は、理想の暗殺者そのものに見えた。
「……」
俺は不満ながらも辛うじて自我を保てているのはソニックが発破をかけ目標を与えてくれたおかげと認めざるをえず、そういう意味でフラッシュに対しても複雑な心境を抱いていた。
「……明日は合同演習のようだな」
「……ああ」
俺の何か言いたげな視線に気付くと、フラッシュは珍しく重々しい口を開いた。目線はこちらに合っておらず、並走は続けたままだ。
俺はフラッシュの心境を推し量るチャンスがきたというのに、その重低音な声色のどこかに恐れを抱いていた。
それは未知への恐れだ。フラッシュという男は良くも悪くも連携の時だけのように『必要なこと以外喋らない』
長い間接するうちに俺はそうだと確信していたのかもしれない。
何か、言葉に言い表せないようなとんでもない出来事が起きそうな予感がしていた。
「俺は明日の模擬戦で1班に上がる」
「憎らしい奴だな、確定したように言いやがって」
「もう確定しているからな、俺がそう決めた」
フラッシュがそう言うのならば、そうなるのだろう。
本気を出したフラッシュの実力ならば恐らく同期の全員でかかってもかなわない。
「それを俺に教えて、どうする気だ？」
「……さあな」

それっきりフラッシュは口を閉じ、開かなくなってしまった。
（結局、俺は一度もお前に勝つことはできなかったか）
その純然たる事実を口に出さなかったのは俺の意地だろう。
俺はソニックに挑み続けるため1班には上がれない。恐らく卒業まで変わらないだろう。
一抹の寂しさが俺の胸をよぎりつつも、俺とフラッシュは並走をやめなかった。

後から思えばこれは、頃合いというものだったのかもしれない。
フラッシュがその後引き起こした事件を思えば、1班に上がったのは地盤固めのためであり立場を上げ教官を探り、動きやすくするためだったのだと容易に想像がついた。
俺とフラッシュが再び武器を持って相対したのは、既に彼が教官と同期生を惨殺し、返り血を浴びた後だった。

惨劇

さらに数年の月日がたち、俺はとうとう忍者の里からの卒業を迎えようとしていた。

結局ソニックに勝つことができなかったが俺も下っ端扱いとはいえ手塩にかけて育てられた２２人の一人。

そう簡単に処分されることはないという確信があった。

とはいえ使い捨てのようにされるのは遠い日ではないだろうが……。

「血生臭い匂いがする」

卒業を目前とした深夜、俺はむくりと起き上がるとひっそりと、真っ暗な建物から抜け出し普段訓練している雑木林へ向かっていった。

俺がそうしたほうがいい、と磨き抜かれた直感で思ったからである。普段止める教官もなぜだかいない。

月夜に照らされた中、草木を掻き分けるたびに異臭が濃くなり俺は顔を顰めざるをえなかった。見慣れた訓練服、苦悶に満ちた表情の頭蓋、四散した手足……。

仲間だと思ったことは微塵もなかった。しかし彼らが同期生であることは変わらない。

教官に対しては憎んですらいた。しかし彼らが暗殺術を伝授してくれたことは事実だ。

俺は背を向けている、血潮がこびり付いた金髪の男を見つけ、静かに問いかける。

慣れ親しんだ男だ。

１番の目標だった男だ。

この中で唯一の生存者であり、この惨劇を起こした実行犯であろう男だ。

「閃光のフラッシュ。お前が殺したのか、生徒も教官も全員……皆殺しにしたのか」

「ああ、そうだ」

閃光のフラッシュは機械的にも思えるポーカーフェイスで俺に向き合った。
いつもと変わらないその仕草とは裏腹に、朱にまみれた金髪が現実をつきつける。
「どうして、と問いてもいいか？」
「ここで過ごしているうちに、暗殺者となる生徒も、切っ掛けのこの施設も含めて悪の種を全て摘み取らなければならないと思っただけだ。力に溺れようとするお前には理解できないだろうがな」
フラッシュは能面のような表情を晒しつつも、心の内側に正義を宿していた。
「お前はずいぶんと俺やソニックに執着を抱いていたみたいだが、目的が済めば普通に暗殺業に走る人間だ。忍者の里の関係者は、悪の源は根絶やしにしなければなるまい」
「……いつになく饒舌じゃないか、フラッシュ」
確かにその通りだ。俺は今までソニックとフラッシュへの憎しみだけで生きてきた人間だ。フラッシュの言った事実は当たっているだろう。
しかしこちらも反論がない訳ではない。お互いの痛い面は手に取るように分かった。
「だがお前自身はどうなんだフラッシュ。お前は皮肉にも忍者の里の最高傑作だ。
お前のその技は、その力は、この里で学んだものでしかない。
お前の存在自体が邪悪の化身なんだ――そもそもお前、ここを出ても死ぬ気はないだろ？」
そう、このフラッシュと言う男は仮にも生きるために必死だった同僚たちを皆殺しにして自分だけはのうのうと生き永らえようとしているのだ。
俺にとって到底許せることではない。
「俺にとってお前は、正義という訳のわからないものに囚われたイカレタ変人にしか見えない」
「盲目のようになったお前には分からなかったかもしれんが、４４期

生は全員が殺人を遂行するための暗殺者であり道具でしかなくなっていた。感情をあらわにしているのはお前とソニックぐらいだ」
お互いの主張は相手に通らない。暖簾に腕押し。糠に釘。
この瞬間、俺とフラッシュの思考は永遠に交わることはなくなった。
最早語ることはない。すっと、フラッシュと俺は刃を構える。
フラッシュが刺突のような構えをするのに対して、俺は刃を地面へ垂直に向けた。
互いの術も、強さも、手の内も知り尽くしている。
「お前が一番厄介だと思っていた。この里の誰よりもお前の成長速度は脅威だ」
「今更聞かされた所で嬉しくもないな。今はお前と同じ考えをしているよ――敵は殲滅するまでだ」
獲物を突き刺すようなフラッシュの構え、一見無防備に見える俺の構え。
一触即発となった俺達の頭上から一枚の葉っぱが枝から抜け、地面に向けてゆっくり落ち始めると同時に俺とフラッシュはその場から掻き消えていた。
忍者の戦闘は一瞬だ。目にも止まらぬ超光速の戦いは、葉が地面に落ちた頃には既に決着がついている。
閃光と終焉の戦い、制するのは――？

閉話　フラッシュから見た終わりのエンド

取るに足らない、路傍の石のような存在。

俺、閃光のフラッシュが常に5班にいる終わりのエンドに抱いた印象はそうだった。

エンドは４４期生の中でも暗殺者としての才能がない、としか言いようがない男だ。

いくら鍛えられても成長が見込めず体術、忍術ともに下の下から進歩する気配がない。

基本的に里にとっての俺達は貴重な商品だが、エンドは里が定めた基準を満たせる要素が明確にない。

忍者の里は暗殺者として不出来な生徒を裏に送り出すことはしない。1流の暗殺者を生み出し続けてきたというブランドに傷がつくためだ。ならばエンドに待っているのは教官による処分、もしくは優秀な他の同期生にエンドを殺させ殺人の経験を積ませる糧となるか、訓練に耐えきれずに肉体が崩壊するか、凡人らしくメンタルが壊れるか。

少なくともエンドが死亡するのは、最後に俺が手を下すまでもなく時間の問題だと思っていた。

最初に異変に気が付いたのは5班の俺か、ソニックだっただろう。

何が切っ掛けなのかは不明だが全く成長が見られなかったエンドの力が、技のキレが、速さが、俺の成長をも凌駕する速度で上昇し始めたのだ。

天才が突如殻を破った、という風でもない。俺は既にエンドの器というものは見切っていた。

器に水を限界まで入れ、崩壊寸前になったと思ったら『器が勝手に広がった』

しかも無尽蔵に。そうとしか言いようがない異様な事態だった。

俺とエンドとの模擬戦もエンドが成長するに従って圧勝から苦戦するようになり、ギリギリで俺が競り勝つことが増えていった。

何の才能もないと思っていた人間が急激に伸びてきたのだから、俺達を鍛えていた教官もさぞ驚いたことだろう。何はともあれ廃棄処分されるはずだったエンドは、再び卒業の資格を手に入れ――――

――――それに応じて俺のエンドへの警戒も上がっていった。

本来は、完全に実力を隠すつもりだった俺が早期に1班に上がらざるを得なくなった理由もこれ以上エンドと過ごし手の内を明かすべきではない、と警戒したためだった。エンドの走行速度は全力の俺に迫りつつある。

俺は絶技をエンドに見せていない。エンドに俺の苦手意識を植え付けたまま計画の実行日を迎えるのが最善だと判断した。そう俺に思わせる程の脅威だった。

加えて俺ですら精神が摩耗するような訓練をしているにもかかわらず一見、一般人のようなまともに見える精神性を持ち合わせていることも不気味でしかなかった。

俺の心境を推し量り親睦を深めようとする。同期生や教官に恩のようなものを感じている。

他の同期生が殺人マシーンになりかけている中でのその立ち振る舞いはかえって異様でしかない。毎日拷問のような訓練を受けている薬づけの人間とはとても思えなかった。

最後までエンドが5班だった理由は間違いなくその精神性だろう。

忍者の里にとっては精神が壊れていないエンドやソニックは失敗作扱いの筈だ。

底が知れない成長速度。岩のようなメンタル。俺に対する執着。

俺が計画を完遂する上で一番の障害となるのがエンドなのは明らかだった。

ソニックと違って、俺を警戒しているエンドに毒物を飲ませることは困難だ。

計画の実行日の深夜、手早く教官を片付け、生徒を誘き寄せソニックとエンド以外を皆殺しにして待つと、案の定奴が来た。

「閃光のフラッシュ。お前が殺したのか、生徒も教官も全員……皆殺しにしたのか　」

俺は今更か、としか思えなかった。エンドほどの実力者が就寝中で建物外とはいえ戦闘に、俺の殺気に気が付かない訳がない。ならば答えは簡単だ。

エンドは無意識に、同期生を見殺しにした。

俺と1対1の戦闘になる上で、余計な戦力はむしろ邪魔にしかならないと思ったためだろう。

凡人の思考をしているかと思えば実は酷薄な面を持ち合わせているのは、暗殺者としてはメリットなのかもしれないが。

結局終わりのエンドという人間は、閃光のフラッシュと戦いたかっただけだ。

やはり忍者の里の関係者は皆殺しにするべきだ。

エンドもまた力に溺れた人間であり、明確な『悪』。閃光のフラッシュが殺すべき人間。

「お前が一番厄介だと思っていた。この里の誰よりもお前の成長速度は脅威だ」

エンドが脅威であろうと、計画を完遂する。

俺が刀を構えエンドを葬ろうとする理由は、それだけで十分だった。

決着と、虚しさと

慣れ親しんだ庭の中。硬い土の地面も、木の幹も、1本の細い枝すら全てを足場として。

俺とフラッシュは跳ねる鞠のように、縦横無尽な軌道を用いて激しい攻防を繰り広げていた。

月光が照らす中、凶器と凶器がぶつかり火花が散る。

風が渦巻き大気は振動で震え続け、木々は大きくしなる。

常人では捉えられる筈もない、コンマ数秒以下の速度での戦闘。

『終極投』

『風刀脚』

俺は苦内を両手から投げる。手から離れたと思えば苦内は消え、既に獲物に突き刺さっているという凄まじい早業の投擲術、故に終極投。

フラッシュは俺の苦内を脚術が生み出した風の刃で容易に弾き飛ばした。

『終散閃斬』

接近した俺は胴切り、逆袈裟斬り、袈裟斬りといった斬撃を一瞬のうちに起こすも全てフラッシュを捉えることはなく地面に深い斬撃跡を残すだけだった。

『重閃斬』

『終焉陣』

フラッシュは俺の刀に刺突を繰り出し破壊しようとするが、俺は強引に刀を持ち上げ刺突を繰り出した刃の刃先を叩き折りカウンターの武器破壊を狙う。俺の狙いを看破したフラッシュは、なんと重量が乗った刺突を途中で刀の切り上げへと転ずることで、武器破壊を防ぐとともに勢いで跳躍する。

『青嵐拳』

俺の頭上から無数に降り注ぐフラッシュの拳は俺の剣の結界を突破できないが、こちらも腕を斬り飛ばす余裕はない。決め手がないと悟ったフラッシュは俺を飛び越えて木々に紛れようとする。その行

動を許容できる俺ではない。
忍者同士の戦闘は、死角を取られればそれが文字通りの死に直結するからだ。
背後から苦内を投擲し、フラッシュの動きを制限した俺は猛然と飛び掛かる。
俺の戦闘本能が大きく警鐘を鳴らしたのはその時だった。
転身したフラッシュはいつの間にか俺に向き直っている。
逃げる獲物を追いかける形となった僅かな油断、フラッシュの目的はその隙をつくこと。必殺のカウンター。
【絶技】
フラッシュが、本気を見せる。
【閃光拳】
先程の青嵐拳とは比べ物にならない。今までの技が全て囮だったのだろうか、そう思える程の猛打の雨あられ。それに加え1発1発の威力も尋常ではない。閃光を思わせる鋭い拳は容易く俺の刃の守りを打ち砕く。体中に衝撃が叩きこまれた俺の大きな隙を見逃すフラッシュではなかった。
【絶技】
抜かれたのは、フラッシュの最強の一閃。終わりのエンドを終わらせる必殺の刃。
【閃光斬】

回避不可能なフラッシュの剣の一閃が、俺の胴体に吸い込まれていく。
走馬灯だろうか？その時俺は世界が、光速の世界の中にもかかわらず更にスローモーションのように見えた。そう、『本当に遅くなっている』ようにしか思えなかった。
だから、俺はその遅くなった世界の中刃を振るった。
必殺のタイミングで技を放ったフラッシュと体勢が崩れている俺。
どちらが勝利するかなど誰の目から見ても明らかだった。
明らかだった、筈だった。

【終焉斬】
俺の刃は、いとも簡単に絶技を放ったフラッシュの刃をへし折った。
何が起こったのか俺自身にもよく分からなかった。
感覚で理解したのは一つだけ。俺はたった今謎の力でソニックとフラッシュの実力に追いつき、追い越した。
越えてしまった。
空虚に襲われた俺は、驚愕の表情を浮かべたフラッシュに追撃を加えなかった。
殺そうと思えば、いつでもできただろう。
だが俺は亀のような鈍重な動きで俺から背を向け、逃亡するのも見逃した。
内から湧き出る謎の力が何なのかは分からない。
俺が望んだ力だった筈だ。それなのにどうして俺はこんなにも空しいのだろうか？
「やっぱり、最後まで忍者としては勝てなかったな――閃光のフラッシュ」
月光が俺という勝者を称えるように燦然と輝く中。
立ち止まっている俺の背後で、ようやく一枚の葉が地面に落ち切った。
その葉は開戦の合図となった葉だった。
これが閃光のような、死闘の開始から終わりまでの出来事だった。

地獄の窯のエピローグ

日が昇る頃。
フラッシュと死闘を繰り広げた俺は、病に倒れるソニックの元に戻ってきていた。ソニックは顔色が悪く、咳き込んでいた。タイミングが良すぎるためフラッシュが毒でも盛ったのだろう。恐らくフラッシュは忍者の里の施設関係者全員を皆殺しにするつもりの筈だ。
俺にはフラッシュの正義は分からなかったが、あいつは徹底的に悪を根絶するだろう、それぐらいは俺にも理解できた。
俺が容態を確かめようと寝具に近づくと、来訪者の気配に気付いたソニックは目を明け俺を確認し自嘲の笑みを浮かべる。外で何があったのか大体察することができたのだろう。
「ここにお前が戻ってきたということは、フラッシュは死んだのか」
「いや、逃げた」
「……どちらにせよ、お前が勝ったのか。そうなってもおかしくないとは思っていた」
数秒の重たげな沈黙の後に、ソニックは俺に向けて独り言のように語り始めた。
「お前が強くなったら、俺の野望を教えてやると約束していたな」
「ああ」
今のソニックの容態で無理をするべきではない。少しでも休息をとるべきだ。
それは本人が一番よく分かっていることだろう。
それでもソニックが話したいこととは何なのだろうか？
「俺の夢はこの忍者の里の最高幹部になって、施設を乗っ取ることだった。ここの組織形態を壊して、施設を乗っ取る。そして俺達のような孤児を自由に、将来の夢を掴めるように育ててやりたかった」
それは夢物語だ、できっこない……そう一笑に付すような理想論だった。
しかし俺はソニックの夢を笑うことはできなかった。
ソニックとフラッシュを超えた俺は目標を見失い、途方に暮れてい

たのもあった。
命令されたことをただやるだけの生活に慣れてしまった、ソニックとフラッシュへの憎しみだけが自我を保つ糧だった。そんな俺に命令する教官も、もういない。
「暗殺術なんて人殺し以外じゃ役に立たない。そうは思わないか」
「……俺達は人を殺すために生まれてきた存在だ。それでいい」
「本当にそう思っているのか？」
間髪入れずに問うてきたソニックの瞳に、表情に俺は気圧されるのを感じた。
相手は寝たきりの男だ。最早俺とソニックの実力は逆転している。それでもソニックの信念を目にして、俺は未だに勝てる気がしなかった。
ソニックは険しい表情を一度緩めると、僅かに微笑んだ。
「お前は強くなったようだが、俺は未だにお前に同情しているし憐れんでいる。
お前のような才能のなかった奴が、未だに俺を看病するほど人としての情を捨てきれないようなぬるま湯に使ったような奴が、こんなクソみたいな場所で暗殺者として育てられた。フラッシュを超える実力を手に入れてしまった。俺はお前のように何もできないままのたれ死ぬような存在を、一番救いたかったのかもしれんな」
なぜだか俺は、以前と違ってソニックが俺を憐れんだにも関わらず怒る気にはなれなかった。
「忍者の里はこれで終わりだ……もしかしたら最強となったお前にもちなんで『終わりの４４期』とでも呼ばれることになるかもしれん」
「……」
実感はないが、そうなる未来は俺にも想像がついた。
これから俺は数多の組織につけ狙われることとなるだろう。
「エンド。強要するつもりはないが――暗殺者にならないでくれないか？」
「……どういうことだ？」
「俺が思うに、本当に価値のあるものは自分の人生を自由に生きる力

だと、そう思っているからだ。傭兵、兵士、用心棒……なんでもいい。流石に正義の味方になっているお前は想像ができないがな」
「違いない」
「残された４５期生……後輩は俺が面倒をみる。だから」
「分かった」

俺は静かに立ち上がる。ここを出て行動するなら迅速に動くべきだ。俺はフラッシュの起こした混乱に乗じて脱出するつもりだった。
最強の暗殺術を持った俺が暗殺者にならない。それがソニックの忍者の里に対する嫌味返しなのかもしれない。もしくは凡人だった俺に対する同情か。
らしくない、とは思った。ソニックも病に伏し気が弱っているのかもしれない。
しかしソニックの最期かもしれない願いを無碍にするつもりは俺になかった。
「ああ、それでいい」
「……」
俺は目を閉じたソニックを置いて寝床から、生まれ育った真っ黒な建物から出る。
静かに、しかし警戒しつつ里の外へ、林の外へ、この世の裏側の外へと消えていく。
今の俺が地獄の窯の外で何ができるのか。それはまだ分からなかった――――。

数年後のとある場所。
「物凄い轟音が続いています！突如Ａ市を襲った大爆発は規模を拡大させ……」
Ａ市を光球が飛び交い、轟音とともに建物が崩れていく。
生み出しているのは青い姿のウイルスの姿をしたような怪人だ。
破壊の権化と化した怪人は……しかし次の瞬間には肉片のようになっていた。

強力な怪人が、まるで死神の鎌が振るわれたように突如細切れになる。
数件あった出来事から、そのような都市伝説がやがて人々の間で浸透していくようになる。
都市伝説の名前はシンプルだった。
『終わりをもたらすもの』
地獄の窯の外で、終わりのエンドは今日もひっそりと生きている。